

2019年 東北大学後期日程試験【英語】問題分析

1 今年（2019）の傾向

総評・講評

【総評】

大問I：論説文読解、大問II：論説文読解、大問III：和文英訳、の大問3問構成。設問数は大問I：5題、大問II：5題、大問III：2題。そのうち客観問題3題、条件を与えられた自由英作文1題。問題構成は昨年とほぼ同様であった。記述すべき量にも大きな変化はないが、今年は字数制限のある問題が2題出題されたことが特徴であった。文章量はやや増加、英文の難度は昨年並み。

【個別大問分析 I】

本文は音や色に関する人間の経験について論じている。一般的な考え方では、音や色は外界に存在し、感覚器官を通じてそれらの情報を受け取ることで人間は音や色を経験している、とされる。しかし、これとは反対に外界と身体・脳の相互作用を通じて人間は音や色の経験を能動的に構成している、という考え方を筆者は紹介している。本文の第1～5段落が音、第6～7段落が色についての議論で、第8～10段落で両方の経験をまとめて論じている。

問1は下線部の問題提起を通して筆者が述べたいことを説明する問題。90字以内という字数制限があるが、解答に必要な情報が書かれている該当箇所を正確に特定し、その部分を訳出できれば概ね制限字数に近づく。その該当箇所になるのは帰結を表す副詞 **therefore** が冒頭に登場する第5段落である。そこでは、音がそれ自体として外界に存在しているわけではなく、外界と人間の身体・脳との相互作用を通じて音を聞くという経験が生じるということが述べられている。これは、本文で挙げられているもう一つの問題（りんごは赤いか）もあわせた2つの難問に対する考え方を紹介している第8段落の主旨にも合致する。訳出する際の注意点としてはイタリック（斜めの書体）になっている **detected** と **constructed** だ。**detect** は「見つける」「検出する」だが、本文の他の箇所も参照して **detected in the world** は「外界で知覚

される」と訳すとよい。また、ほぼ同内容について述べている第8段落では **passively detect** と **actively participate in constructing** という対比がなされているので、字数に余裕があれば「受動的に知覚される」「能動的に構築する」というように全体の主旨を踏まえたかたちで解答を整理しよう。

問2は下線部和訳問題。下線部は2つの文から成るが、第1文の注意点は **even with...** の訳し方。With+O+C を **even** で強調しているが、ここでは「たとえOがCであったとしても」と譲歩の意味で訳す。また、主節に関しては、「音」に関する場面で下線部(B)にほぼ対応する内容を述べている第4段落の第1・2文を参照すれば、**a done deal** が **complete** に対応することが読み取れる。第2文は、冒頭の **for**+意味上の主語+**to do** の構文を正確に捉えよう。この **to** 不定詞句は主節に対して「目的」の意味を持つ。

問3も下線部和訳問題。ここでも **for you to experience...** が **for**+意味上の主語+**to do** のかたちになっている。ただし、この **to** 不定詞句は過去分詞 **required** と結びついて、全体として直前の名詞 **the information** を修飾している。「～を経験するために必要とされる情報」。また、**corrected by the light...** は過去分詞の分詞構文。直前の名詞 **your predictions** を修飾するとも受け取れるが、主節の主語 **the information** を意味上の主語としていると理解する方が本文の主旨に合う。**the information** が他の箇所での経験(**experience**)、**your predictions** が概念(**concept**)、**the light...from the world** が外界から与えられる感覚(例えば下線部(B)の **a visual sensation**) に対応していることが読み取れると「情報(経験)が主に予測(概念)から生じ、この情報が外界から脳に取り込まれた光(感覚)によって修正される」というかたちで三者の関係が整理できる。

問4は指示語の内容を説明する問題。下線部 **do it** が指すのは同じ段落冒頭の **with prediction ... “see” color in your mind’s eye on demand** である。但し、ここでの **see** は引用符で強調されていることからわかるように特殊な意味で用いられている。感覚器官の目を使う通常の「見る」ではなく、対象を「想像」して心の目で「見る」。また、見る対象としての色は下線部の前後で言及されている「森の緑色」であるから、これも明記しておこう。

問5は選択式の空所補充問題。本文の主節 **to believe otherwise is naïve realism** の

otherwise が指す内容を正確に特定できていれば、そこから空所(E)に当てはまる内容も類推できる。otherwise は直前の内容(Every perception is constructed...)を指しているので、それを踏まえて主節を訳すと「あらゆる知覚は知覚する者によって構成されているのではないと考えることは素朴な実在論である」となる。この考え方とは、知覚という経験は人間によって構成されるのではなく、外界の物体をありのままに受け取ることであり、という考え方になる。したがって、(イ)「知覚は現実と同一である」が正解。

【個別大問分析 II】

本文では、情報科学技術の進歩によって手書きが不要になったかどうか論じられている。筆者の基本的な立場は、技術が進歩しても手書きは必要であるというものだが、それを問5自由英作文の設問で、受験生にまとめさせている。なお出典の原文では、この部分に対応する英文はない。本文の長さは若干長めである。設問は英文和訳が1問(Itの内容を明示)、説明記述が1問、自由英作文1問、記号選択(英文言い換え、語句の意味)が5問である。説明問題を上手くまとめるのが、やや難しい。

問1は下線部(A)の内容と同じ内容の英文を選択する問題。下線部の意味は「Eメールや携帯メールが郵便に取って代わったことや、学生がノートパソコンでメモを取ることを考慮して、"Cursive" writing (1つの語の文字をつなぎ合わせて書く書き方)は全米学力共通標準から消滅してしまった」。全文の意味がわからなかったとしても、Given that A and that Bが「AやBを考慮して」と判断できれば、(エ)Considering the reality that A and that Bが同意だと判断できる。

問2は下線部和訳。「Itが指す内容を明らかにして」と指示があるが、形式主語のItではないことに注意する。ここではlearnの目的語が主語になった構文なので、前文の(to) press the right keyがItの内容である。構文上のもう1つの注意点は、whatever the letterがbe動詞の省略された副詞節であること。「文字が何であっても」と訳す。

問3は下線部(1)~(4)の意味を選択する問題。(1)promptedはcontroversyが目的語なので「議論を引き起こす」の意味で(ア)causedが正解。(2)singularはbut typing is notの文脈

をヒントに考え、(エ)remarkable「並外れた」が正解。(3)advocatesはこの後にデジタルの文書を支持する意見が述べられているので(ウ)supportersが正解。(4)drawing onはworkが目的語になっているので、「参照する」という意味で、(エ)usingが一番近い。

問4は下線部の意味を説明する問題。"desirable difficulty"は「よい結果をもたらす困難」という意味だが、直訳的に「望ましい困難」と読み取れば、意味は判断できる。下線を含む段落内から、「困難」なのは、「情報を言い換えることは、要約して把握する準備作業を必要とする」作業であり、「望ましい」のはその作業で「情報をよりよく理解する」とことと読み取り、80字程度にまとめる。なお「X字程度」という指示の場合、±10%（今回は72～88字）を目標にまとめる。

問5は「手書きが今でも日常生活で重要な役割を果たしている」という主張を支持する英文を複数の実例や理由を挙げて述べる、自由英作文問題。本文で述べられている手書き擁護論は以下にまとめるが、それを含まないで作成しなければならない。

- ・〔第4段落〕筆記体の読み書きができないと、祖父母からの誕生日祝いの手紙や教師のコメント、憲法や独立宣言の手書き草稿が読めなくなる。
- ・〔第5・6段落〕手書きは子どもの認知発達に影響を与える。
- ・〔第7段落〕コンピューターで文字を書くことが、決まった基準と書式に従うものであるのに対し、手書きはかなり自由に書ける。
- ・〔第9・10段落〕子どもでも大人でも手書きができるほうが読む能力が高い。
- ・〔第11段落〕手書きをするほうが身体で文字を覚えることができる。
- ・〔第12・13段落〕手書きのほうが授業の内容をよく理解できる（情報の要約把握能力が高くなる。）

以上の内容を踏まえ、解答例では「感情をこめたり読み取ったりできる」、「書き手の個性を表現できる」などを含めた。

【個別大問分析 III】

和文英訳問題。出典は森岡孝二「働きすぎの時代」より。働き方に疑問を持ち、ライフスタイルを変える人が増えつつあること、および、労働の長時間化は地域社

会にとっても弊害となることを述べた文章からの出題。英訳箇所は2箇所。日本語自体の分析力も問われている。

(A)

まずは日本語自体の構造分析が必要だ。「ライフスタイルを転換する人々が」「増えている」の部分が主節を構成する核となる。「仕事一辺倒の働き方に～などに直面して」の部分が〈時・状況〉を示す部分。「...に疑問を持ち」と「...などに直面して」が並列構造になる。「健康問題～定年など」はすべて、「直面する」対象。「...に変わったり」「...移住したり」「返上したり」の3箇所は、ライフスタイルを転換する方法ないしは結果などであると解釈すれば、英語としての方針が見えてくる。すなわち <状況>[仕事の仕方に疑問をもち、諸問題に直面した際] <方法>[転職をしたり、転居したり、残業を止めたりすることで] <結果>[ライフスタイルを変える人が増えている。] といった構図が見えれば第一段階クリアだ。

具体的には次のような英語にしていこう。「近年は」についてはrecentlyやthese daysなどが使いやすい。recentlyを選択する場合は、現在完了形と共に用いる。these daysの場合には現在形や現在進行形と組み合わせるのがよい。「人々が...増えている」については、the number of those who ... increasesという表現を軸にすると考えやすい。the numberは単数で受けることには注意しよう。「仕事一辺倒」は一度別の日本語に置き換えて考えよう。解答例のように「もっぱら仕事に身を捧げる」と考えてmonotonous devotion to a job としたり、別解のように「仕事以外のことはしない」と考えてdo nothing but workなどとすることもできる。また、「一日中仕事をする」と考えてwork(ing) all day longなどとすることもできるだろう。「健康問題」や「子育ての悩み」などに相当する表現は解答例および別解を参照して欲しい。いずれも日常的によく用いられる言い回しであるため、知識として蓄えておく必要がある。

「～に疑問を持ち」have doubts on/about～。「～に直面して」be faced with。これは能動のfaceでもよいが、受動的に置かれた状況であると考えるとやはり受身の構造がよりよい。上述のように「疑問をもち」と「直面して」の二つの構造は並列で、ライフスタイルを転換するに至る状況、という位置づけで書かれているので、whenや

asを使って従属節としてまとめるか(解答例)、この二つの構造で一度文を区切り、SoやThenを間に置いてから、「変化」についての英文を進めていく(別解)、という手もある。「労働時間の短い仕事に変わったり～返上したりして」の部分は、能動的に生活を変えるための手段と捉えてby doingを使ってもよいし(解答例)、「疑問を持」ったり、悩みなどに「直面し」たりした結果と考えてもよい(別解)。

(B)

「長くなればなるほど、～は少なくなり、～は希薄になって」の部分は、<the + 比較級, the + 比較級>の構文が使いやすかろう。「より多くの時間を、仕事をするに費やす」と考えてpeople spend more time in working / people spend more hours on workなどをベースに考えよう。<the+比較級, the+比較級>の構文を使う場合、後半部に注意が必要だ。今回、主節(帰結)となる部分が「少なくなり」「希薄になって」「困難になる」と3パーツあることになる。この構文では主節部分を3並列させることは避けたい。なぜならば、A, B and Cとした場合、AとBの並列関係をつなぐ目印であるカンマ(,)が、<the比較級, the比較級>の構文の従属節と主節をつなぐカンマと混同され兼ねないのだ。この問題を避けるため、解答例ではCに相当する3つ目の主節部分を、関係節の継続用法 (... , which～) を用いている。また別解では、「希薄になる」(=2パーツ目。Bに相当)までで一度文を区切り、「～が困難になる」(=3パーツ目。Cに相当)は独立した文として書き分けている。さて、その最後の部分「町内の共同業務や助け合いを維持することが困難になる」は、解答例では形式目的語のitを用いてmake it difficult to do～、別解では形式主語のitを用いてit is difficult to do～としている。「維持する」の目的語となる名詞句は並列構造も含まれるため長くなっており、日本語の順番通りに訳していくと読みにくい英文になるからだ。形式主語であれ形式目的語であれ、英文としての構造をスッキリとしたわかり易いものにするために必要な技術である。先ほどの<the+比較級, the+比較級>の構文で行った工夫と同様、読む者に誤解と混乱を与えない文章、すなわち、減点されにくい英文を書くための配慮として参考にして欲しい。

2 合否ライン（予想）※他の教科が合格ラインをとったときの得点（％）予想

【文系】

経済学部	60%
------	-----

3 来年受験する生徒へのアドバイス

読むべき英文の量は毎年少しずつ増加している。そのためまずは、1,000語数を越える英文であっても15分程度で読みこなせる読解力が必要だ。そのうえで、必要な情報を、設問と文脈に合わせて取捨選択できる思考力が必要である。日頃から、文章を読んで和訳を確認するだけでなく、大きな視点で文章全体を要約する練習、筆者の意図を精確に追う練習が必要だ。また、読み取った内容を正しく採点者に伝える言語能力も不可欠だ。この場合、使用言語が日本語であるか英語であるかを問わず、相手に正しく伝えるための語彙力、文法力はもちろん、読み手(採点者)側に立った上での工夫と配慮が必要ということになる。

また、自分の意見を英語で記述する問題も近年、出題傾向が強い。今回のようにいくつかの条件を与えられても書ききれよう、日頃から世の中の様々な事柄に関心を持ち、それらに対して自分の意見を、しかも複数、用意しておくことが求められる。